

手すりの二名家

玉造と紋十郎

天保十年、十一歳から舞臺に出て、明治三十八年二月十二日、七十七歳で歿するまで、六十餘年の生涯を人形舞臺に捧げ、終始文樂

座の爲めに盡した、先づ年功から云つても、第一の殊勲者は吉田玉造であらう。

玉造は荒事でも女形でも道化でも、人間でもない動物まで巧みに遣つて、その上、宙乗りから早替りまで、なんでも遣れるといふので、俳優の尾上多見藏のやうに『兼ル遣ひ』といふ名稱を世間から貰つた。



吉田玉造の像

江戸猿若町の芝居で、石橋の獅子を使つて江戸つ子を驚かしたことがある。

松嶋文樂座初興行の時、松嶋八景の所作事で、七化けの早替りで見物を驚かした。

(明治五年一月)

その文樂座で、五天竺の、孫悟空になつて寧ろ冒險的な宙乗りを行つた、その奇抜さが當つて、七十日間大入を續けた。(明治十三年五月)



「五天竺」繪番附

文樂が御靈へ移つた明治十七年九月の初興行に、夜這星の所作で、二階棧敷三方の勾欄を、まるで飛鳥のやうに飛行した。その他、

お染久松の七化、玉藻前の狐、廿四孝の狐火、伊賀越新關、千本櫻御殿、菅屋道滿、八犬傳、狹間合戦、七福神寶船、四谷怪談、詠聞、秋七草、小倉色紙、大江山、など頗る玉造の活躍に適した狂言である。

太夫の見臺から現はれたり、懐ろから出たり、天井を縦横無盡に駆け廻はつたり、まるで輕業師のやうなことでました。見物は知らず／＼好奇心に馳られて吸ひ寄せられた。

これ等宙乗り早替りの工夫に與つて力のあつたのは、玉造に友人として、市川米十郎（後の小團次）や中村梅玉があつたからに違ひない。

かうした活躍と勤勉家に相應した丈夫な體軀を玉造に與へた神様は、玉造が死ぬる年の正月元旦に、病床にある彼に、七つの餅を與へて試めされた。ところが、その餅をケロリと平げた玉造が平氣な顔をしてゐたので、神様も追がに舌を捲いて驚かれた。

勤儉といふ奴が通り越して駑奴になると、ちよつと評判が悪くなる、その程度の蓄財家だつた玉造は、所持金は寝ても醒めても、宙乗りでも早替りでも、滅多に鬱金木綿の財布に入れて離すことではなかつた。紙幣は破れ易くていけない銀貨がいく、銀行へ預けては破産をしられては危険、かう賢明なる考察力をもつてゐたので、あるだけの金はふところへ押し込んで置くといふ流儀。

玉造がかうして金を貯めるのは、倅の玉助は死んでしまひ、孫の富吉は盲目なり、なんとか後の爲めを謀つて置かねばならぬと、ついでに人情の然らしむる處に従つたばかりで、別に理由は無さそうだ。（富吉は、現在東京に居る富崎大檢校のこと）

この外に玉造と中村鴈治郎、その他の逸話は前項——清水町濱興行の賑ひ——にあるから、それについて讀んで貰ひたい。

藝人は若くなければ駄目だといふので、戸籍面改正の時、ほんとは天保十二年生れなのに四五年偷んで、弘化二年生れだとヨクを飛ばしたのが女形人形の桐竹紋十郎。だから四十二年八月十五日に死んだのは、實は七十歳なのである。玉造と同様親からの人形遣ひで親は桐竹門十郎といつた立者である。

醤油屋、砂糖屋、下駄屋、乾物屋、摺墨屋、何處でも皿背りばかりした丁稚奉公時代、所詮は人形遣ひになりたいといふので、親もとう／＼我を折つた。蛙の子は蛙の子だ。

十四五歳の時、祭文の能勢山席で、朝顔日記の大井川の場の、深雪の足を遣つたが、無能だとタツタ一度で足あがり。

文樂座へ入つてからは、父の死後父の名の桐竹龜松と名乗つてゐたが、或時先代萩の床下の鐵之助を遣つたところ、相變らず無能で頭取の二代目吉田玉治は、——とても物にならぬ——ととう／＼最後の宣告。

嚇つと憤慨はしたものゝ、事實は事實。龜松手も足も出ない、そこで懷中僅か十六文を命のたよりに、とぼ／＼と江戸を志して大阪を見捨てたのだつた。



桐竹紋十郎の像

どうせ死ぬほどの目にも遇つたことだらうが、やがて三代目西川伊三郎といふ女形遣ひの名人に拾はれることになり、その父親の陸奥大掾、道化遣ひの辰松六三、などに就て今度は本氣に勉強をはじめた。その結果いよく女形専門の素志を固めたのである。その昔の辰松八郎兵衛、文化文政頃の二代目吉田辰五郎、嘉永の二代目吉田辰造、など女形専門の名人は

至つて勘ない、その名人の數に數へられるまでに皿背り小僧は出世をした。

紋十郎一代の至藝として許されるものは、政岡、板額、お辻、阿古屋、お三輪、お俊、玉手御前、おさん、帯屋のお絹、酒屋のお園おつま、お千代、お谷、などだが、明治九年四月、松嶋文樂座で、『一の谷』の相摸を遣つたのが斯界に認められた出世藝。

◆
師匠の西川伊三郎について淺草の芝居へ出てゐた頃の話。忠臣藏の九段目が出てゐたが、師匠の戸無瀬で、紋十郎は力彌の足を遣つてゐた、いつまで経つても足ばかり遣つて苦勞をしてもはじまらない、せめては大阪へ歸るお土産に———どうぞお情けで一度でいゝから頭を遣はせてください———と悲しい聲を出して頼んだ。

◆
師匠は紋十郎の心を酌んでくれて、大へんな役をふつてくれた、それは下女おりんの一人遣ひの人形である。紋十郎はがっかりしたが、それでも足よりはましである、兎に角一人前の體軀は備へてゐるおりんである、小言は云へない、そこで紋十郎考へた、せめて此役を一人前に遣へるやうに工夫をするより外はないと。そこでウンと頭をひねつたのだ。

◆
やつと一風を案出して、そこで此場を語る織太夫に先づ賛同を求め、左手と足を遣つてくれる相棒を頼んで、いよく新工夫の實演といふことにまで漕ぎつけた。戸無瀬が小浪を連れて門口で案内を乞ふと、———昔の奏者今のりん、ドーレ———といふところ、紋十郎かねての新案、下女おりんは、赤い襷、髪を鬢付けで突つ立てさせ、結びかけた髪といふ思ひ入れ、飛んで出る、二人の顔を見て吃驚し、先づ襷をはづし、髪をキリ／＼と巻き上げて簪で止め、その手を前垂れで拭いて、それを帯にはさみ、両手をついて『どなた様』といふ段取り。命がけの新工夫はとう／＼世間から認められた。

◆
この新工夫が云ひ傳へられて、歌舞伎でも、可なりの名俳優が此りんの役を御馳走役に買つて出る慣例が出来、紋十郎の型によつて勤められることになる、と今度は上方へもその通りの習慣が傳へられる。人の一心ほど恐ろしいものはない。

◆
紋十郎が此世の暇をつける、その四十三年の四月興行、阿古屋の琴責で、特に注文をして三貫目もある重い人形を遣つた。その阿古

屋がとう／＼病氣に觸つたらしい、病臥中はたゞ芝居の囁語ばかり云つてゐた。

◇

最後の前日の夕暮、二十四孝の八重垣姫を、仰臥したなりで、手ぶり足どりで、細い嘎れ／＼の聲でかけ聲をして、遣つてゐるやうな容子をしたりした、看護の人達は皆聲を吞んで泣かぬものはなかつたといふ。果してその翌曉四時、眠るが如く此世を去つた。

血の出るやうな難行苦行

淨瑠璃道修驗者の體驗

◇

時代は進んだ、科學は發達した、機械力が萬能になつた、電氣が物を言つた、人間が伶俐になつた、一足飛びに出世をした、テンポの時代、レビュウの時代、かうした目まぐるしい常態である現代から、ふりかへつて淨瑠璃道の修行といふものを觀てみる。むろん、古臭くも見へやう、馬鹿正直でもあらう、ノロマでも致し方が無い。彼れ等は骨を削り肉を殺ぐより外の方法は、修行ではないと思つてゐたのである。難行苦行といふ文字は、あながち修驗道の行者ばかりが經驗した熟字でもない、淨瑠璃修驗者には半分は分け與へて然るべしである。

以下尠しくその實例について云つてみる。

その實例を述べる前にちよつと斷つて置きたいが、これはむろん、現在の淨瑠璃界のことではない、淨瑠璃といふものを自分の命とし、淨瑠璃といふ神様に身命を捧げてゐた時代、即ち明治二十年頃までの淨瑠璃國の國民の間に行はれたことであつて、現代のやうな文化の發達した時代の淨瑠璃境界の人々からは、まるで夢の世界を觀るやうに不思議なことばかりで満たされてゐる筈である。本題に入る。

◇

その頃淨瑠璃國の法律は、序の切を語れるやうになるまでは、羽織が着られない、冬でも蒲團（樂屋）が敷けない、皮草履が履けな